

吉本隆明

シンポジウム
津軽・弘前
'88の記録

吉本隆明
菅谷規矩雄
村瀬学
鈴木貞美
長野隆

「太宰治」を語る

吉本隆明

シンポジウム
前弘・軽津
'88の記録

吉本隆明
菅谷規矩雄
村瀬学
鈴木貞美
長野隆

「太宰治」語る

大和書房

吉本隆明「太宰治」を語る
シンボジウム津軽・弘前88の記録

一九八八年一〇月二二日初版発行

著者◎ 吉本隆明「菅谷規矩雄」村瀬学

鈴木貞美「長野隆

発行者 大和和明

発行所 大和書房

東京都文京区関口一―三三

郵便番号一一二

電話(二〇三)四五一一

振替東京六一六四二二七

印刷所 暁印刷

製本所 ナシヨナル製本

装丁者 菊地信義

写真 山岸千冬「岩井康頼

落丁本・乱丁本はおとりかえします
ISBN4-479-72030-8

目次

第一部

講演

物語のドラマと人称のドラマ

——吉本隆明

11

I 生と死の境を越え易い資質

13

II 人称のドラマ

28

III 文学・芸術イコール倫理ということ

36

第二部

講演・質疑

「いたたまれなさの世界」

——菅谷規矩雄

47

基本的な像として

47

「逃げる」と「折り合いをつける」と

51

鎮められた「いたたまれなさ」

53

現代における太宰治の位置

——村瀬学

60

吉本隆明氏の講演につなげて

問われるべきコピーの力

60

写真というモチーフ

62

軽さと道化の関連

64

太宰治の基本形

——鈴木貞美

67

吉本隆明氏の講演に即して

一人の敵役として

67

自画像のうまい作家

69

フィクションでしか生きられない

72

感想ひとつふたつ

——吉本隆明

75

ユニークな話体への作家

75

太宰治のサービス精神

76

売文の最小限のモラル

——旅芸人の精神

78

第三部

討議

シンポジウム

いま、なぜ太宰治なのか

吉本隆明 菅谷規矩雄 村瀬学
鈴木貞美 長野隆(司会)

隠遁・韜晦・やつし 90

絶対一人称をどう解体するか 91

時代のなかの死 95

運動する作家 96

映像の問題はローカルな問題である 101

風景の発見・故郷の発見 105

津軽というトポス 107

人を信頼することは悪なりや? 120

イメージしか信じられない 126

再び、文学すなわち倫理ということ 134

津軽・津軽人とは何か 138

太宰にとつての津軽とは？——イメージの問題 144

『人間失格』は文学的生涯の総決算か？ 149

芸と倫理 159

母が、世界が、もてないということ 166

詩人的資質と作家的資質 170

政治と文学 181

『人間失格』には生涯がみえる 190

表現史のなかの太宰治 192

いま、批評はどう可能か？ 197

イマジナリイナンバーとしての太宰治 199

第四部

補論・参加者の声

「すべてが見える」高みとは——村瀬学 205

『道化の華』『東京八景』『人間失格』の比較を通して

煙草はからだに……——大谷尚文 217

シンポジウム 津軽・弘前⁸⁸に参加して——畑有三 219

「シンポジウム 津軽・弘前⁸⁸」幻像——阿毛久芳 222

吉本隆明への旅——山田兼士 224

太宰治シンポジウム「津軽・弘前⁸⁸」の余白に

〈現場〉へのオマージュ——坂東健雄 232

「津軽・弘前⁸⁸」

津軽で『津軽』を論じること——松岡裕枝 234

シンポジウム《吉本隆明——太宰治論》を振りかえつて——長野隆 235

シンポジウム前後のこと——弘前大学教育学部近代文学研究会 237

あとがき——吉本隆明 242

吉本隆明「太宰治」を語る

シンポジウム津軽・弘前'88の記録

第一部 講演



物語のドラマと 人称のドラマ

吉本隆明

今日は、太宰治論ということで一時間半ばかりの予定でお話していきたいと思います。たぶん僕等は太宰治に生前に会った最後の年代なような気がします。僕はちょうど『春の枯葉』という太宰治の戯曲を学生芝居で上演するため、原作者に了解をえにくことを口実にして熱烈なファンとして出かけていってお会いしたことが一度あります。その時のことはとても鮮明な印象でのこっております。ここで太宰治のお話をするのは、僕にとつては書くことも含めて太宰にふれる三回目くらいの機会だと思っています。

今度この弘前へくるのに自分なりに読みかえすものは読みかえて印象を確かめてまいりました。かくべつに新しい事実が加わるかどうか別ですが、ただ幾つかお話してみたい項目は用意してまいりました。それを申し上げますと、第一番目には、生と死の境界は越え易い人と越えにくい人があるわけですが、太宰治はたぶん越え易い人だったということ

についてです。太宰は生涯に何回か自殺とか自殺未遂とか、それもだいたい心中っていう形で女性と一緒に死を試みては失敗しということをやっています。その都度未遂に終わりましたが最後には心中を完成したっていう感じをもちます。こういう生涯をふりかえってみると、太宰治は生と死の境界が越え易い人だったんじゃないかなと思うのです。そこで太宰に関わりながらどういう人が生と死の境が越え易くてどういう人が越えにくいのかというのを第一番にお話してみたいのです。

それから、もうひとつ第二番目として言ってみれば、太宰の作品の文体のことをお話してみたいんです。文学表現上の方法のことといってもいいんです。そのうえで生と死の境界を越え易い太宰の資質と、作品の文体の特色のあいだにもし関連があるのなら、それを関連づけてみる理由をお話してみたいと思います。

そして、だんだん絞っていったとしてもし時間がありましたら、太宰治は倫理というのをどう考えていたか、もっと具体的に文学の倫理あるいは芸術の倫理をどう考えたかを関連づけてお話出来たらと思います。余る所がありましたら、また第三部のシンポジウムもあると聞いておりますので、そこで少し補足が出来ることもあるかもしれません。そうしたいと思います。

I 生と死の境を越え易い資質

生と死の境界っていうのは、どうして越え易かったり越えにくかったりするのか、そして太宰治にとってなぜ越え易かったのかということからお話してみたいと思います。初期の太宰治の作品に『猿ヶ島』というのがあるのをご存じでしょう。それから、おなじく初期に『思ひ出』という幼年期、少年期、それから中学生時代までの思い出をとてもいい文体で書いている作品があります。その二つを素材にとりあげながら生と死の境界を越え易い人と越えにくい人の相違はどうしてできるのか、太宰治の場合どうして越え易かったのか考えてみます。

『猿ヶ島』という作品は、ご承知だと思いますが、「私」という一人称が猿だという書かれ方です。「私」という猿は日本からどこか遠い所に送られてきています。そして、放たれる場所に小さな山ができてるっていうところから始まるわけです。「私」というのが猿である身を以てその周囲の見知らぬ景物を叙述しています。「私」はどっかに運んでこられて、霧が晴れてみると峰が三つ見えて小さな山のところにいるわけなんです。すると、山の向こうの方に種類のちがう猿がいっぱいいて、キャッキャッ啼いたり騒いだりしております。その中にボンと置かれて、自分がどこにいいのか、何のために此処にいるのか

解らないところから始まるわけなんです。仲間の猿に此処はどこなんだと訊くのですが、霧が晴れてみると、眼の色がちがう人間がゾロゾロゾロ柵のむこうを歩いていきます。そして、自分が捕えられるんじゃないか、危害を加えられるんじゃないかって考え、仲間の猿に一体何なんだあれば、此処はどこなんだ、と訊きます。此処は見せ物の場所なんだと教えられて初めて、自分が外国の動物園に連れてこられて、見物人の眼に晒されてることが解ってきます。

この作品は、いろんなふうに読むことができます。これは当時の文壇の世界での自分の場所、位置を寓喩したものだとも読めないことはありません。ここでは何かのメタファーだろうというように読んでみます。それは何かって言いますと、一種の被害感覚のメタファーだと思います。それ以上はつきり具体的な何かのメタファーとして解釈できないことではないですが、そうしない方がよろしいような気がいたします。漠然とメタファーとして感じられるのがいいと思います。ポツッと知らない所に連れてこられて、ゆるい檻禁の状態で、たくさんの視線を浴びて、その視線を自分が被害感覚としてしか受け取ることができない。そういう心の状態を考えてみますと、そのメタファーとして読むと、説明にはいちばん正確に近い読み方になると思います。

この場合「私」は猿で猿自身の眼から一人称で描写されてるわけです。太宰にはもう一つ初期に人間が生物に変身してしまう作品があります。『魚服記』です。これも、お読み